

会長 松井 和夫

あいさつ(要旨)

群馬県退職校長会



「ぐんま教育の日」推進大会

みんなで支え合い、支え育む「群馬の子ども」
～「ぐんま教育の日づくり」をめざして～

令和3年度「ぐんま教育の日」推進大会の開催にあたり、県内各

地より、会員の皆様、関係者の方々、大勢の皆様にお集まり頂きまして誠にありがとうございます。
また、本日は公務ご多用の中、後援の群馬県教育委員会教育長平田郁美様、市町村教育委員会連絡協議会より6名の教育長様、教育事務所長様、共催団体より群馬県教育振興協会長菅原英直様をはじめ、関係団体皆様方のご臨席を頂きました。さらに、今年度からは、共催団体に群馬県PTA連合会様と、群馬県高等学校PTA連合会様が加わって、大会推進と連携の輪が一層大きく広がったの開催となりました。
「教育の日」関連の大会開催は本年度で15回目を迎えています。毎年関係団体との連携・協力によって継続的に開催するのは、「ぐんま教育の日」制定の趣旨の一層の理解を図ることと、その内容や実践事例発表の成果

「ぐんま教育の日」推進大会
地域連携の推進・市町村の特色ある教育施策の実践事例発表会

令和3年11月20日(土) 前橋市第3コミュニティセンター

群馬県
退職校長会だより
第83号

発行 群馬県退職校長会
前橋市岩倉3-1-1
前橋市総合教育プラザ内
TEL 027-235-1574

編集 広報部長 金子修
印刷 朝日印刷工業株式会社

を多くの方々広めて頂き、「ぐんま教育の日」の推進・充実と、「市・町・村教育の日」制定・充実、また、学校・家庭・地域社会の連携・協働の推進、学校教育の支援となることを願っているからです。この大会を通して、県内の次代を担う子どもたちに「生きる力」を育むため支援する気運を社会総当たりで一層深め、充実を図ることが出来ればと考えております。

「教育の日」制定は全国連合退職校長会が「国民がこぞって教育の大切さを考え、学校教育、家庭教育、社会教育などあらゆる教育を包括し、その振興を願期する日」として提唱し、現在では38都道府県に制定されています。群馬県は11月1日を「ぐんま教育の日」と平成19年に定めています。また、「市・町・村教育の日」は本県では、前橋市、藤岡市、渋川市、沼田市、明和町、神流町、上野村に制定され、それぞれ特色ある活動が展開されています。ここ数年は県内では新たな制定がないのが実情ですが、この制定・推進活動は現在も継続し、未制定市町村に制定を要望しています。

大会のテーマやサブテーマとして「学校・家庭・地域社会の連携・協働の推進」については、第3期群馬県教育振興基本計画や第2期群馬県教育大綱で示された方針と内容からも、重要な施策として計画的に着実に進められていることが分

かります。また、中央教育審議会の「令和の日本型学校教育の構築に向けた今後の方向性」の答申では、「個別最適な学習や学び」「協働的な学び」などが示されていますが、今後も、学校だけでなく地域住民と連携・協働し、学校と地域が相互にパートナーとして、一体となって子どもたちの成長を支えていくことがますます重要であると打ち出されています。

「ぐんま教育の日」推進大会の実践事例発表では、このようなことから、「ぐんま教育の日」の目的に沿った地域をキーワードに、地域連携の推進に関する活動をテーマにして、発表をお願いいたしました。

本日は、高崎市立京ヶ島小学校、前橋市立明桜中学校、群馬県立大間々高等学校と、上野村の「かじかの里学園」の実践事例発表後、群馬大学大学院教育学研究科客員教授平林茂先生より講評を頂くことになっております。

結びに、大会スローガンは、「みんな考え語り合い、支え育む「群馬の子ども」」「輝く群馬の人づくり」をめざしてです。

このスローガンの実現に向け「ぐんま教育の日」推進に一層のご理解を頂くとともに、今後も「市・町・村教育の日」の制定・推進、充実・発展にお力添えをお願い申し上げます。開会のあいさつといたします。

祝辞

群馬県教育委員会 教育長代理

教育次長 村山 義久



本日、令和3年度「ぐんま教育の日」推進大会が開催されるにあたり、心からお祝いを申し上げます。

また、群馬県退職校長会及び一般財団法人群馬県教育振興会の皆様には、日頃から本県の教育行政の推進にご理解ご協力を賜り、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

長きに渡った新型コロナウイルス感染症の感染拡大が、学校現場のご尽力等もあって一定の落ち着きを見せ、学校生活も活気を取り戻しつつあります。県教育委員会として引き続き学校の感染防止対策が徹底されるよう、各市町村教育委員会とも連携を密にして取り組み、子どもたちが健康で安全に楽しく豊かな学校生活を送れるよう努めてまいります。

さて、コロナ禍により社会が急速に変化する中、学校教育も大きな転換点を迎えているように思います。特に今年度は、小・中・高・特別支援学校に新たに配備された1人1台端末の活用が本格的に始まります。新しい学習指導要領が小中学校で全面実施となるなど、変化の年になりました。ソサエティ5.0時代の到来に

より、社会の在り方が劇的に変わると言われますが、学校においても小学1年生から、端末をいわば文具として活用することで、授業や学校生活が大きく変わっていくことになり、活が大きく変わっていくことになり、重要です。しかし、教育にあつては不易や社会性、コミュニケーションの力などを育む様々な取り組みについても、これまで以上に重視をして取り組んで参りたいと思えます。

また、新しい学習指導要領は、教育課程の編成実施にあたり、家庭や地域社会との連携・協働を深めることを求めています。県教育委員会と致しまして、コミュニティ・スクールと学校・家庭・地域が連携・協働する学校づくりを進め、学校教育の一層の充実と、地域の活性化につなげて参りたいと考えております。

このように、かつてない変化の時代にあつて、次代を担う子どもたち、たくましく生きる力を育むためには、地域全体で家庭教育を支援する気運を高めていくことが、何より大切です。

本日お集まりの皆様が、学校・家庭及び地域社会の連携・協働のもとに、未来を担う子どもたちの教育について考える、県民に広く普及するための活動に継続して取り組まれていることは大変意義深いものであります。

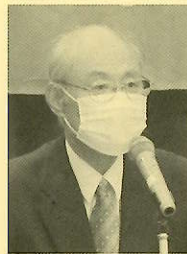
本日は、小・中・高等学校における地域連携の推進に関する実践事例、上野村教育委員会より特色ある教育施策の実践事例の発表が行われると聞いております。皆様の活発なご議論により、群馬県の教育に対する県民の理解がより一層深められ、実りある大会となることを期待しております。

結びに、ご参会の皆様のご健勝を心からご祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします

祝辞(要旨)

(一財)群馬県教育振興会

会長 菅原 英直



今日は、このようにたくさんの方々のご出席を頂き、今年度の「ぐんま教育の日」推進大会が盛大に開催されますこと、誠に改めてとうございいます。

教育振興会は、日頃より皆様方から多大なるご協力とご支援を頂いておりますことに感謝申し上げます。

私は、7月に県の退職校長会の事務局を訪問した際、群馬県退職校長会創立50周年の記念誌を頂きました。その中に「教育の日」制定に関わる経緯が資料に詳しく掲載されており、制定に至るまでの先輩方の変なご

苦労と熱意が分かり、頭の下がる思いがしました。

そこで、全国の「教育の日」の制定に関わる動向について調べてみました。この「教育の日」は、平成8年全国連合退職校長会で活動が始まり、平成11年には「教育の日」制定趣意書を作成し全国に呼びかけました。それを受け、群馬県退職校長会も「教育の日」制定特別委員会を設け活動が始まりました。退職校長会は、平成15年に県議会議長に「教育の日」制定に関する請願書を提出し、県議会では、趣旨を採択しました。平成19年に県教育委員会が、11月1日を「教育の日」と制定しました。今年も制定されてから15年目ということですが。

結びに、本大会の成果が、教育の充実・発展に生かされることを願い、祝辞といたします。

事例1 小学校の実践事例

高崎市立京ヶ島小学校

発表者 校長 古澤 浩明

地域とともに歩む

学校づくり



本校は、高崎市東部にあり、創立148年を迎え、歴史と伝

統のある学校です。

児童数は439人で、学級数は19です。児童は、12地区から通学して来ます。それぞれの地区は、区長を中心に非常によくまとまっており、地域住民は、子どもたちに対する教育支援には熱心です。

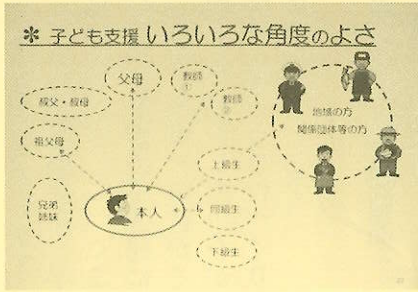
本校の教育目標は、「キラキラ輝く凛とした子を育てる」であり、そのもとに目指す児童像を具体的に設定し、教育活動を行っています。

平成25年度・26年度に文部科学省の指定を受け、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）がスタートしました。構成員は、区長会長、公民館長、学識経験者、地域住民代表、保護者代表、学校職員からなる16名です。

運営組織は、「全体会」と「三部会」の2つから成り立っています。「全体会」では、16名の委員全員で協議や情報交換を行います。

「三部会」では、次の部会ごとに活動しています。

- (1) 学校運営部会（学校運営全般・学校課題・今日的課題について協議します）
- (2) 防災・安全・環境部会（子ども支援いろいろな角度のよさ



もたちの安全環境と環境改善について協議します）

(3) 学習支援部会（子どもたちの学習活動への支援を行います）

「三部会」の具体的実施している活動の内容は次の通りです。

- ① 第3学年対象の放課後学習への支援
 - ② 学習支援部会による各教科への学習支援
 - ③ 地域ボランティアによる朝の読み聞かせ
 - ④ 民生児童委員による朝のあいさつ運動
 - ⑤ 京ヶ島校区教育振興会による寄付活動や情報交換活動
 - ⑥ PTA地域合同による通学環境美化及び総合安全点検活動
- 現在は、変化の激しい時代だからこそ先を見据えつつ互いの思いを大切に、地に足のついた学校経営・学校教育実践を進めていきたいと考えています。



事例2 中学校の実践事例

前橋市立明桜中学校

発表者 校長 川上 辰幸

地域とつながる学校づくり 前橋版コミュニティ・スクール

としての取組

本校は、統合校として今年の4月に開校し、前橋市教育委員会が独自に進めている前橋版コミュニティ・スクール作りに取り組んできましたが、コロナ禍のため協議会が開けず発表校としての独自なものはまだほとんどないため、その説明が大部分になってしまいました。

前橋版コミュニティ・スクールとは、学校支援協議会を導入した学校ということですが、国の学校運営協議会とは幾分変えた前橋市独自の制度で、学校評議員会に代わり設置することができまます。

協議会設置要綱では、協働というキーワードで、その目的達成のため学校運営全般について校園長に対して意見を述べるとともに、学校運営の基本方針に基づき、教育活動に参画するものとあり、委員の人数は10人〜15人程度です。

すなわち、学校支援協議会とは、以前からあった学校運営について意

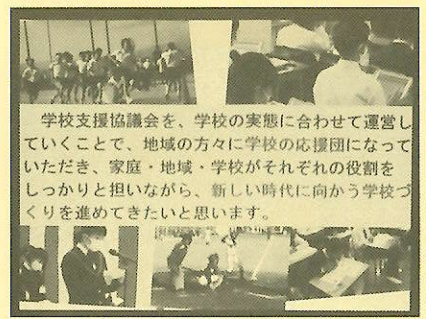


見を述べると、協議員と学校の様々な教育活動に対して協力や支援をする学校支援ボランティアが一体となり、お互いに補完しあう組織であるといえます。

この制度の導入により、学校のメリットとして、新学習指導要領の体現、学びや体験の充実、人間関係の広がり、居場所づくり、地域の理解と協力があげられます。また地域や保護者のメリットとして、地域力の向上、学校を中心とした地域づくり、生きがいや自己有用感へつながることがあげられます。

組織づくりの例としては、いくつかのチームを作り、その代表が協議会の委員となり、教育活動の立案等の役割を担い、その結果を各チームに持ち帰り、活動の充実・改善につなげていくという形になります。

学校支援協議会の設置や運営のポイントは、今ある機能や組織を価値づけること、教育活動への地域の方や保護者の参画の場を設定し学校運営の当事者になってもらうこと、学校と地域のニーズや教育資源をマッ



チングさせることであると思います。終わりに、学校支援協議会を、学校の実態に合わせて運営していくことで、地域の方々に学校の応援団になって頂き、家庭・地域・学校がそれぞれ役割をしっかりと担いながら、新しい時代に向かう学校づくりを進めていきたいと思えます。

事例3 高等学校の実践事例

群馬県立大間々高等学校

校長 高橋 みゆき

井上浦造SDGsみらい塾

発表者 生徒 鈴木夢叶 福島朱莉

長谷美里奈 深澤 諄

小澤愛絆 武井悠人

河崎夏摘

コロナ禍での学校活動紹介



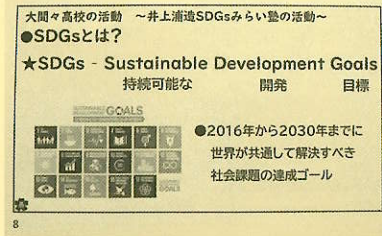
私たちは初代校長、井上浦造の精神を受け継ぎ、生徒が主体的に社会的課題に向けて考え行動するリーダー

大間々高校では、SDGs（持続可能な開発目標）を中心に、多様な

を認め合い、地域と共に歩む学校づくりを目指しています。SDGsを学ぶことにより、考える力↓貢献する力↓困難から回復する力を養うことは、本校の教育目標であり、学校全体で共有しています。さらに学びを深めるため、様々な方々に講義を頂きました。東京大学名誉教授上野千鶴子先生とのやり取りは、ライブ配信も行い、県内外から多くの反響を頂きました。そして、大間々高校は、女子用スラックスの導入に踏み切りました。

みらい塾は、スラックスのはきやすい環境を作ろうと考えましたが、二つの壁にあたりました。一つは、女子がスラックスだと「性的マイノリティなの？」と、偏見を持たれるかもしれない。そこで、トランスジェンダーの方に話を伺い、ありのままの自分を表現すること、素直に受け入れることの大切さを知り、自分たちでフィルターをかけていることに気がきました。二つ目は、地域の人

はどう思うのか、地域に分かってもらう活動もしなければという点でポスターと動画を製作し、ポスターは店や公共施設に配り、動画は



学校のホームページに載せました。また、コロナ禍でも学びを止めないために新しい文化祭を実施しました。地域全体をフィールドとし、私たちが地域を散策しました。地域と学校がつながっていることに改めて気付く文化祭でした。

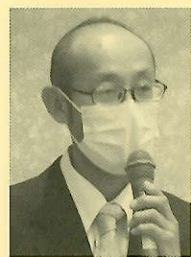
最後に、大間々高校のこれからについてです。私たちの目的は制服や校則を変えることではありません。本来にこれでよいのか、これがベストなのかと、今までの物事の見方を検証し、私たち生徒自身の意識を変え、そして地域や社会の意識を変えていく、多様性のある社会を実現させたいと考えています。

事例4 市町村における実践事例

上野村 山のふるさと合宿

かじかの里学園 園長 村上 和嗣

かじかの里学園について



上野村の教育委員会が運営・管理する山村留学施設「山のふるさ

と合宿・かじかの里学園」が開園したのは平成4年のことでした。この頃私は、大学を卒業して上野村役場に採用になりました。面接の時、当時の上野村村長の黒沢丈夫さんに次のように言われました。「日本を背負って立つ人間をここ上野村で育てたい」と。

私は、「何かを学ぶためには自分で体験するしかない」というアインシュタインの言葉を信じています。このことが30年間にわたる、かじかの里学園での教育活動のベースになっています。

現在学園に在籍している小学生は10人、中学生は2人です。この12人の子どもたちは、平日は地元の上野村小・中学校に通い、学校のみならず、部活動や委員会活動なども、村の子どもたちと一緒に協力し合い、切磋琢磨しながら学校生活を送っています。帰宅してからは、次の朝登校するまで学園で過ごしています。

学園での生活は、父母のいる家庭での生活に近づけようとしています。ですが、全く同じにはいきません。子どもたち



は、ここで共同生活を送りながら、都会では体験できない暮らしの知恵や技を学びます。

当学園は、開園当初から豊かな自然を舞台に、様々な自然体験活動を実施し、自然とのつきあい方を学んでいます。主な活動は、キャンプ、川遊び、裏山探検などの野外活動。木工、陶芸、草木染めなどの創作活動。和太鼓や楽器演奏などの表現活動などです。また、異年齢集団でお互いに助け合いながら暮らしています。特に、食に関しては、ニワトリの糞を堆肥化して畑に入れ、そこで栽培した野菜を調理して食卓にあげます。残った野菜くずや残飯を家畜に還していくようにしています。

このような活動を通して、子どもたちは真の意味での「命の大切さ」を知り、「生きる力」を養うことになっています。

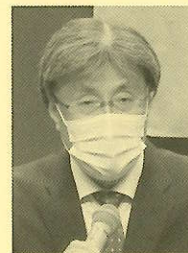
こうした活動を支える職員は、役員職員の園長を含め5名、指導の補助員として2名が子どもたちをサポートしています。



講評

群馬大学大学院教育学研究科

客員教授 平林 茂



京ヶ島小学校は、運営協議会に三つの部会があり、密で具体的な

話し合いにより、活動が充実・改善・進化・発展し形骸化しないことに繋がっていると感じました。

明後中学校は、主に前橋版コミュニケーション・スクールの話で、今ある組織を価値づけ、地域や家庭が学校運営の当事者になる実行力のある組織だと思いました。

大間々高校は、SDGsという考え方を学校と生徒が共有し、高校生らしい行動と社会に貢献しようという取り組みで、そこに地域の大人たちの支えがあると感じました。

上野村かじかの里学園は、現代の教育に必要な体験活動を多く取り入れ、地域の人たちが積極的に子どもに関わって、知識ではなく知恵を教えていると感じました。

教育を推進するための地域連携の大切なことは、地域で子どもを育てるために行動やアクションを共有していくことと、学校と一緒に行動し教育に主体的に関わり当事者意識をもって行動に移していくことです。

生き生き人生

前橋支部 松岡 三吉

年年歳歳花相似
歳歳年年人不同

此翁白頭眞可憐
伊昔紅顔美少年

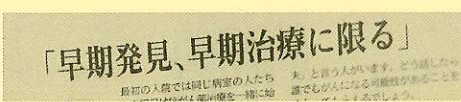
初唐の詩人 劉希夷（字は庭芝、廷芝。一説に名が庭芝で字が希夷ともいわれる。651年―679年）

の「代悲白頭翁」の抜粋です。この詩は高校の漢文の教科書に載っている折に触れて思い出していました。高校生の時などは未来に向けて「わくわく感」などがあり、「生き生き人生」であったかと思えます。退職後から出身大学の同窓会事務局の仕事もさせて頂いて、米寿のお祝いや会報発行の仕事にも携わっております。会報の一部には入会者やお悔やみに関する記事があり、この詩の意味を実感しています。この詩人は現状をこの時代に喝破しているようにも思えます。

「いきいき人生」の題を頂いたのですが、畑をトラクターなどで耕し、最近ではタマネギの播種・育苗・植付、にんじんや大根の手入れなどを、時間を見つけてやっています。題に近いかどうか分かりません。ところで、米寿のお祝いには同窓会として記念品を贈呈させて頂いておりますが、電話で、また、手紙・葉書など

で、お礼の言葉を事務局宛にくださる方々もおられます。電話を頂いたときに「元気なお声で何よりです。」などと話させて頂くと「声だけは元気だけれど身体はなかなかいいことを聞かない。」などと張りのあるお声で仰る方もおられます。電話や手紙等でお礼の言葉をくださる方々こそ、「生き生き人生」を実践されているのではないかと日頃から思っています。

先日、ある病院に行つて、写真のような壁に貼つてある新聞を見ました。乳がんについての記事です。この記事だけでなく、医師の話や有名な製薬会社のホームページでは、「がん」の原因ははっきりとは分かっていないが、遺伝的な要素より、「誰でも発症する」と考えて、「原因は分からない」としても、治療方法はあるので、早期発見・早期治療が大事。」とのこと。最新の医学でも原因に応じた治療ができていくわけではないが、早期発見・早期治療ができれば、寿命を延ばすことができるので、「生き生き人生」実現の切り札のようにも思います。悪性の病気に罹患しても治療が効き生きることができれば、気持ちを切り替えて、「生き生き人生」に近づけるのではないかとともに思っています。



が、早期発見・早期治療ができれば、寿命を延ばすことができるので、「生き生き人生」実現の切り札のようにも思います。悪性の病気に罹患しても治療が効き生きることができれば、気持ちを切り替えて、「生き生き人生」に近づけるのではないかとともに思っています。

生き生き人生

組み合わせでなんとなく

良いものを!

北群・渋川支部 関上 博

先日、寺社建築の屋根替えを行う匠（檜皮葺師・柿葺師）の意見を目にしました。研ぎ澄まされた、息もためられる空間の中で、どのような心構えや日常の準備が説かれているかと期待していた私にとっては、驚く言葉の連続でした。

「職人の仕事は失敗がつきものである。失敗の山はチャレンジの山、モチベーションが下がらなければよしとする。そのためには、目標はアウトなぐらいがよい。また、仕事上の目標を決める際に、完璧なものを求めようとすると、たいいては仰々しい枠組みにとらわれ、これでもかといじくりまわしているうちに、プランそのものが頓挫してしまう。そこで、私なら自分の尺度で8割できていれば合格とする。我々の仕事は、国宝クラスのここ一番の時にはホームランを打たねばならないが、通常の仕事はヒットでよし、2塁打なら万々歳とする。毎回全力で当たることは理想だが、息切れしてしまう。また、親方とすれば、若い職人に華を持たせるため犠牲フライを打ち上げてやったり、奇襲のセー

フティーバントで得点をあげてやったりもする。それを効果的にするためには、しなくてもいい仕事は極力省くようにする。仕事は自分なりの優先順位をつけてひたすら上位から片付けていく。本当にやらなくてはならない仕事と、なんとなくやっている仕事とを分け、90点以上を求め、90点以下は60点から70点で合格とする仕事を組み合わせ、全体としてうまくいっているとした状況を作るようにする。」とのことでした。

読み終えて、驚きと、なるほどと思うことが次から次へと頭の中を駆けめぐりました。

今、教育現場では、90点以上を意識するあまり、健康を損ない心を病む職員が後を絶ちません。「子どものため」と自分で自分にむち打つ姿が日常茶飯事です。また、教育は理論と計画に基づくものと論され、膨大な資料に目を通すことが無意識のうちに行われていきます。「このことが不要ですか」と問われると必要と答えざるを得ません。あれも必要これもない状態になっています。そして、じわじわと跡を継ぐべき若い人たちが教職を敬遠していきます。なんとか応援できないものかと焦るのですね。いい考えがうかびません。そんなとき、この匠の意見を目にしました。この考えを教育の場でも取り入れられないものかと考えます。

学校は

ICT活用促進プロジェクト

実践推進校としての取組

利根郡川場村立川場中学校

校長 菅原 慶成

本校では令和2年度からICT活用促進プロジェクト実践推進校に指定され、本年度は2年目となる。昨年度は9月に県教育委員会から41台のタブレットを貸与され、3年生を対象に実践を行った。本年度は川場村から生徒全員に貸与されたタブレットを利用し、1人1台端末を活用した、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向け取り組んできた。

令和3年度の実践

①道徳科における実践

本年度校内研修で共通の教科として「道徳科」を扱い、「考え、議論する道徳の授業実践」を行っている。授業の中にICT活用の視点を取り入れ、生徒が他者の考えを知ったり、自己の考えを相手に伝えたりする場面で活用できるかどうかを検証している。授業ではポジショニング機能を活用して、個々の考えや偏りなどを視覚的に理解することができた。また、発表ノートのグループワーク機能を活用することで、他者の考えと自己の考えを比較したり、参考にしたりして考えを深めることができ

た。電子黒板に表示することで、周りの進捗状況等を生徒も把握しながら進めることができた。

②数学科における実践

数学では、生徒用端末にもデジタル教科書を導入した。その結果関数ツールや図形ツール、統計ツールなどを扱うことや、動画コンテンツが使えるので、生徒は手元のタブレットを使用しながら問題を考え、実際に目で見て操作しながら思考することができ、問題が解く際に有効な手助けとなった。

③英語科における実践

職場体験で学んだことをALITに分かりやすく伝える学習で、スピーチの様子を動画で撮影した。相手に伝わる話し方



であるか客観的に見られたり、グループで画像を見ながらアドバイスを合えたりできるので、内容の向上を図ることができた。

④イングリッシュキャンプでの実践

例年川場村では国際交流事業としてホームステイを行っている。昨年は中止となり、今年は村内宿泊施設を利用して、4日間「Zoom」を用いてネイティブスピーカーと1対1で英語を使って生活する活動を

行った。通信環境等手探りの取組となったが、教育委員会事業としてタブレット活用の好事例となった。



授業ではない活用で、生徒の「学習の個性化」に資する活動であったと言える。

⑤職員研修

- ・教育DX推進スタッフ（5・6月）
- ・群馬大学教育実践センター
- ・紺谷正樹先生招聘（7月）
- ・株式会社Skyのスタッフによるオンライン（8月）

○まとめに代えて

この2年間、コロナ禍とGIGAスクール構想の波に押されてきた取組であった。タブレットを使うことで多くの生徒の考えを短時間で知ることができたり、自分の考えを深めたりするのに役立つことは多くあった。またデータを蓄積することで、生徒が自ら変容に気付いたり、教師が評価の際に活用したりすることもできた。一方で使う場面や発問を精選する必要があるなど、新たなツールを用いる上で教師の授業力向上が求められている。ICT活用は時代の流れであり、生徒にとって効果的・効率的なものであると同時に、教師

はより魅力的な授業のために研鑽しなければならぬと再認識した。

学校は今

地域に根付く学校として

東吾妻町立坂上小学

校長 高橋 直樹

本校は吾妻郡東部の中山間地に位置する児童数42名の小規模校です。少人数ながら子どもたちは元気に学校生活を送っています。本校ではこれからの社会に生きる子どもたちに必要不可欠な情報活用能力を身に付けること、豊かな心の育成のため、地域と関わる体験活動を多く取り入れることを重点として、地域に根付く学校づくりを行っています。

○情報活用能力の育成

・1人1台パソコン

情報機器は、未来を切り拓くツールと捉え、当たり前のように使いこなせればと考えています。本町では昨年度末に1人1台パソコンが導入されました。今までとは全く違うタイプのパソコンであるため、教職員も児童も「試行錯誤」を合言葉に手探りでまずは、パソコンをいじってみることから始めました。教師側から教えることは必要最低限にして学習を始めると、例えば、子どもたち

はカメラ機能をいじりながら「ここを触ると画面に線が出たよ」、「あつ、反対側が写った」などと、お互いに発見したことを伝え合いながら学びを進めることができました。また、週時程に週1回のクローズムブックタイム（学習に対応して選んだアプリケーション3つセットにしたものを時間表に組み入れた）を組み入れ、全校的に取り組みを始めました。現在では、Gワークスペース（学習に利用できるアプリケーションがいくつも集まったもの）の各アプリの他、ミライシード（全教科で学べるタブレット通信教育の名称）の活用に取り組み始めたところです。

・プログラミング教育

これからの社会においては、あらゆる活動においてコンピュータ等を活用することが求められると言われています。そこで、学習指導要領で示されているプログラミングに加え、プログラミングロボットを活用して、実際に子どもたちにそれを動かす体験を導入しました。パソコン画面上だけでなく、自分の思ったように実際に動かせることで楽しく学べるようになりまし

○地域と関わる体験活動

子どもたちに体験をなるべく多くさせたいと考えています。そこで、体験活動を意図的に取り入れていくようにしています。特に栽培活動では、地元の方々の方が欠かせません。

米作りでは、平環境保全協会の方に世話になり、田植えや稲刈りの体験活動をさせて頂いています。農村地帯とはいえ、子どもたちが農作業をすることはほとんどなく、冷たい土の感触が新鮮なようです。また、本校敷地内にある学校畑では、地元農家の方が畑に肥料を入れて耕すなど面倒を見てくださっています。昨年度、サツマイモが全くとっていいほど収穫できない状態でしたが、作付けにあたりご指導を頂き、畝の作り方、サツマイモの植え方を変えたところ、天候不順な今年でも一転豊作となりました。さらに、毛筆の指導では、導入段階や書き初め大会実施に当たって書道教室の先生に、指導して頂いています。その他にも、今年度は実施できませんでしたが、水泳指導でも地域の方が指導に当たってくれています。また、学校から地域に出て行く活動として、春には地域を巡る遠足を毎年実施しています。

本校は、特別に研究指定等を受けているわけではありませんが、地域に根付く学校として、以上のような取り組みをしています。



文化遺産

太田金山、子育て呑龍

太田支部 武藤 哲也

上毛かるたにうたわれている「金山」と「呑龍さま」は、太田のシンボルとして太田市民に大変親しまれている観光スポットです。今回はそんな「金山」と「呑龍さま」を散歩気分でご紹介いたします。

「呑龍さま」の詳名は、「義重山光院新田寺」です。慶長16年、徳川家康の命により、徳川家の先祖とされている新田義重を祀る寺として建立されました。開山は呑龍上人です。呑龍上人は困窮する庶民の子どもたちを自らの弟子として預かり、育てたことから「子育て呑龍」とも言われるようになりました。

大光院の本堂の裏手には呑龍上人の御廟があります。そこには呑龍上人の墓とともに呑龍上人に命を救われた源次兵衛の墓もあります。源次兵衛は、鶴の血が病に効くということから、病に苦しむ父を救うため当時捕獲が禁止されていた鶴を捕らえ殺害してしまいます。そのため犯罪者として追われる身となってしまう。源次兵衛は、呑龍上人に救いを求めて大光院にやってきました。源次兵衛の親を思う心に感心した呑龍上人は、源次兵衛をとめない信州小

諸に逃れ彼を救済します。5年後に罪が許され、ふたりとも太田に戻れるのですが、呑龍上人の人柄を伝える話として今に伝わっています。

御廟から山沿いを歩いて数分のところに、応永24年に新田義貞を追善供養するため建立されたといわれる金龍寺があります。本堂には新田義貞の木像が安置され、境内には歴代金山城主の五輪塔や新田義貞の供養塔があり、太田市の重要文化財に指定されています。秋には紅葉の絶景スポットとして、太田市民の憩いの場所でもあります。

金龍寺本堂の裏手、供養塔の前を通り過ぎるといよいよ金山登山となります。急な山道を30分ほど登ると金山山頂に到着します。頂上には復元された金山城の石垣と通路があり、当時を偲ばせてくれます。金山城は、文明元年に新田一族である岩松氏により築城された山城で、国指定史跡とともに日本百名城に選定されています。現在は、本丸跡に新田義貞を祀る新田神社があり、神社の裏手には野面積みの石垣が、当時のまま一部残っています。

なお、金山城の詳しい情報については、金山の麓にある「史跡金山城跡ガイダンス施設」の見学をお勧めします。本施設の外壁は、金山城の石垣をイメージしたもので、隅研吾氏の設計によるものです。

参考文献 まんが太田の歴史

物故者の御冥福を会員一同心よりお祈りいたします

〔敬称略〕

《令和3年6月16日〜12月10日受付》

馬場 勇 (前橋)	88
茂木 宗雄 (佐波)	93
加藤 晨司 (高崎)	85
小川 恭一 (高崎)	86
善女寺忠五郎 (高崎)	91
小澤 興康 (高崎)	84
女屋 文子 (前橋)	95
澁谷 和郎 (桐生)	65
山口米三郎 (吾妻)	87
清水 昭 (安中)	78
高橋 董 (利沼)	87
杉戸 信雄 (桐生)	87
金井 勇二 (甘富)	91
大槻 正好 (太田)	91
小川 正祺 (甘富)	96
小内 安藏 (太田)	94
内田 寛一 (高崎)	83
吉原 宏 (前橋)	10
川邊喜一郎 (邑館)	11
清水 正良 (高崎)	91
市川 光一 (高崎)	91
林 徳次郎 (邑館)	90
関 久男 (吾妻)	11
星野 勝文 (桐生)	80
寺田茂登司 (太田)	93
齋藤 昇 (高崎)	90

令和4年度(2022年)群馬県退職校長会 定期総会のお知らせ

- 期日 令和4年5月20日(金)
- 時間 午前10時
- 会場 マック・スクエア スワン

事務局体制について

- 事務所開所日 毎週 火・木・金曜日
- 開所時間 9:30~15:30
- 会員数 (12月10日現在) 1,660名
- TEL 027-235-1574
- E-mail T-0017@bi.wakwak.com

編集後記

今年度も新型コロナウイルスの関係で宿泊研修会や関東甲信越地区退職校長会連絡協議会、現職・退職校長会連絡協議会、各支部ごとの活動等の多くが中止となり、特集は「ぐんま教育の日推進大会」のみとなりました。そのため、実践事例の発表内容を多く掲載してあります。

ワクチン接種が進み少し安心していましたが、新たな変異株「オミクロン株」が急拡大し日本でも感染者が確認されています。3密の回避やマスクの着用、手指消毒等、基本的な感染対策を引き続き徹底し、感染予防に努めましょう。